

書 評：

WILLIAM J. RUST and the Editors of U.S. News Books

—Kennedy in Vietnam—

(New York, 1985) 252p.

中 江 新

「アメリカの戦争」前史への接近

本書は、ウィリアム・J・ラストを中心とする“U.S. New Books”の編集者達がジョン・F・ケネディ政権下の対ベトナム政策の展開について論じたものである。近年アメリカでは、ケネディ・ジョンソン両政権下の対外政策に関する公文書の公開が進みつつある。本書はそうした一次資料—主にNSC（国家安全保障会議）、国務省、JCS（統合参謀本部）、CIA（中央情報局）などの研究文書、メモランダム、議事録—を積極的に調査し、当時の政権担当者達への独自のインタビューも多く利用している。既存の文献と共にこうした新しい資料を駆使することにより、ケネディ政権の政策決定過程を再構成しようとする努力が払われているようである。

さらにこうした作業を通じ、「1963年にリンドン・B・ジョンソンが大統領職を引き継いだ時点で、ベトナムでの全面戦争はどれぐらい切迫していたのか？もし暗殺によりその政権の座を失うことがなかったなら、ケネディはどのような政策を追求したのか？」といった問題に答えを出すことが試みられている。アメリカの対ベトナム軍事介入が本格化するのにはジョンソンに政権が移ってからである。しかしベトナム戦争が「アメリカの戦争」になった背景には、ジョンソンが継承した多くの「歴史的遺産」があったことも事実である。その意味で、前任者ケネディが築いた遺産をひとつひとつ検証してゆくことは重要であろう。その一方で、ケネディの政策スタイルの独自性に注目し、「彼が生きていれば」という、ある意味では半永久的なテーマに挑戦するのも興味深いと思われる。

また、本書は学術書的な体裁をとるものではなく、実証性に徹する平易な文

章で書かれている。さらに一次資料やインタビューをふんだんに用いて、実証的に問題点に迫る著者達の態度は、ディーン・ラスク元国務長官が評しているように冷静 (dispassionate) である。同時にそれは著者達がベトナム戦争の生々しい記憶からある程度距離を置いた立場にあるからこそ、可能なのかもしれない。

全体の構成は以下の通りである。

Introduction: Socratic Questions

1. Kill All the Paratroopers!
 2. We Must Change Our Course.
 3. A Certain Dilemma.
 4. A Slowly Escalating Stalemate.
 5. More Vigor Is Needed.
 6. Who Are These People?
 7. The Point of No Return.
 8. We Must All Sign On.
 9. Plausible Denial.
 10. Nine, Nine...Nine, Nine.
- Epilogue: A Very Disturbing Situation.

ケネディとベトナムのかかわり

まず序章の中から、本書の伏線を拾い出すことができる。1963年11月20日、ケネディはマイケル・フォレストル補佐官を呼び、対ベトナム政策の徹底的な再検討を命じていた。「南ベトナムという国は存続してゆけるだろうか？ あの国に難局を乗り切らせることはできるだろうか？」こうした基本的な問題を指摘して、彼はみずから築きあげてきたベトナムへのコミットメント（年間4億ドルの援助、約16000人の軍事顧問団の派遣、南ベトナムの政治体制への介入など）に疑念を表明したのである。だが、彼は決してベトナムから撤退すべきだとは言わなかったので、フォレストルにとってこれは「ソクラテスの問答 (Socratic Questions)」であった。しかもこの2日後にケネディは暗殺されてしまったから、彼みずからこの問いかけに答えを出すことは永久になくなったのである。

その一方で、ケネディのベトナムとのかかわりは、下院議員として第一次インドシナ戦争を視察した頃にまでさかのぼる。彼はベトナムの独立とナショナリズムを重視する反面、共産勢力のベトナム支配には一貫して反対してきたのである。

こうした彼のベトナムに対する見方は、政権担当期間を通じてどのような変遷をたどっていったのか。そしてなぜみずからの政策に疑念を表明するまでになったのか。そうした意味での伏線がここに引かれているのである。

反ゲリラ戦争の展開

さて、本論では主に二つの面からケネディの政策が考察されている。その第一はベトナム民族解放戦線（いわゆるベトコン）と北ベトナム人民軍に対するカウンター・インサージエンス反ゲリラ戦争の展開で、それは本書の前半である第二章から第五章の中で扱われている。

この面でもまず重要なのは、ケネディが反ゲリラ戦争の観点からベトナムに介入していった背景についての著者達の考察であろう。1961年にケネディが大統領に就任した頃、外交の重要なテーマである冷戦の争点は、キューバ、コンゴ、ラオス、そしてベトナムなどの発展途上地域に拡がりつつあった。なかでもキューバおよびラオスの情勢は、ケネディにとってきわめて重大であった。

まず1961年4月17日のピッグス湾侵攻事件が挙げられている。CIA指揮下の反カストロ派亡命キューバ人によるキューバ秘密上陸作戦は、カストロ政府軍の「思わぬほどの迅速で強力な」反撃に合い、大失敗に終わったのである。その結果、ケネディ政権への信コンフィダンス頼は著しく傷つけられたのであった。

さらにケネディの在任中、度重なる危機を持たらしたのがベトナムに隣接するラオスの内戦であった。とりわけ彼が大統領に就任したばかりの1961年3月、「大規模な」ソ連の空輸と北ベトナムの「戦闘員」に支援された左派政治勢力パテト・ラオが中立派と連合して急速に力を伸ばし、それはアメリカの支援するフオミ・ノサバン将軍の右派勢力を圧倒する勢いであった。しかも北ベトナムは、このラオスにある軍事拠点と無数の山岳ルートを通じて、南ベトナムへ浸透する共産ゲリラへの補給を続けていたのである。アイゼンハワー前大統領より「東南アジアの要」としてのラオスの戦略的重要性について強調されていたケネディは、事態を憂慮し、共産側に対してアメリカによる軍事介入も辞さ

ぬという姿勢を誇示した。しかしながらその一方で、彼はこの国がアメリカの戦闘部隊を送り込むには兵站上の問題が多く、しかも北ベトナムと中国という二つの強力な軍事力を持つ共産主義国に隣接しているうえ、ラオス人の戦闘能力に大きな制約があることは認めざるをえなかった。

結局この1961年のラオス危機は、アメリカの介入を恐れる北ベトナムが停戦を求めることで収捨され、ケネディ政権も前任者が「不道徳」とみなし続けてきた「真に中立的な」ラオスの実現を求めることで妥協を図るようになる。その後もラオスの内戦は幾度か繰り返される一方、ジュネーブでは関係諸国によるラオス中立化交渉が進められた。

ピッグス湾侵攻作戦の失敗とラオス中立化の容認はケネディ政権の威信を傷つけ、「その指導力への疑念を引き起こすことになった。アメリカ国内でも、世界とりわけアジアの同盟諸国においても、ケネディが「共産主義に対処するための決意に欠けているのだ」という批判が巻き起こった。このことはとりもなおさず、60年代の冷戦状況の中で第三世界での土着共産勢力の伸長がそのままアメリカの後退およびクレディビリティの低下と結びつけられていたことを示すものであろう。その意味でキューバ、ラオスに続くアメリカの威信の低下をくい止め、その決意を誇示する場として南ベトナムが選ばれたのだとする著者達の分析は実に明快である。

こうした問題を背景に、ケネディがベトナムで展開した反ゲリラ戦争の戦略と戦術について論じられてゆく。

1961年1月28日、ケネディは「国防総省および國務省の共同計画」である「カウンター・インサージェンシー・プラン反ゲリラ戦争計画 (C I P)」を承認し、アイゼンハワーから引き継いでいた南ベトナムへの軍事援助政策を「北ベトナムの通常兵力による侵入を防ぐ」という観点から、「共産ゲリラに対して国内の治安を守る」という観点に移して続行することになった。すなわち「共産ゲリラのテロリズム、破壊活動、ゲリラ戦争の戦術に対抗するために、公然および非公然の軍事、政治、社会経済プログラムを組み合わせたものが必要とされたのである。」

さらにこうした戦略を遂行するために、様々なオプションが採用されることになった。まず第一に、ケネディ政権の下ではアメリカの通常兵力をベトナムに派遣することは一貫して回避され、南ベトナム政府軍を訓練するための軍事顧問団および特殊部隊という名目で兵員が派遣されていた。通常兵力による際

限のないコミットメントを避けつつ、南ベトナム軍を強化することができるとみられていたわけである。しかしながら1961年10月の段階でマックスウェル・テラー補佐官によって提案された8000名の通常部隊を派遣するという計画さえ一蹴されていたのが、1963年末までには顧問団の数をその約2倍の15914名にまで拡大してしまったのである。しかもこれらの顧問団はアメリカ製のヘリコプターやプロペラ爆撃機を操縦し、上空から対ゲリラ掃討作戦を支援するほか、地上での戦闘でも直接指揮をとるようになった。彼らは顧問ではあっても戦闘員ではないという区別は大方「^{アカデミック}非実際的」になってしまったのである。さらに彼ら顧問団の役割は南ベトナムの国内に限られずラオスおよび北ベトナムに対する南ベトナム政府軍の秘密軍事活動—工作員の潜入、襲撃、共産ゲリラの補給路の切断など—の支援も請け負っていた。ケネディの下では、北ベトナムに対する秘密活動は計画の段階にとどまったが、それはジョンソンに「政策の論拠や軍事計画の面で、アメリカ軍がベトナムで直接的な役割を果たすうえでの主要なステップを提供」したのである。

さらに1963年4月のラオス危機を通じて、ケネディ政権はJCSに対し、1年前に成立した連合政府協定によってもパテト・ラオへのテコ入れを止めようとしない北ベトナムに対する空および海からの攻撃計画を立案させると共に、海兵隊部隊をベトナムの沖合いへ派遣していたのである。

また南ベトナムのゴー・ディン・ジェム政権に対しては、ゲリラ戦争は政治戦争であるという観点から国内政治と軍の指揮系統の改革を同時に迫ると共に、国内の各省における民間警察グループシピリアン・イレギュラー・ディフェンス・グループの設立、農民をゲリラの浸透から隔離するための戦略村ストララジック・アムレツトの建設を通じて草の根レベルからのゲリラの根絶を図ろうとした。しかし結果はあまり思わしいものではなかった。ジェム政権は、再三にわたるアメリカからの国内政治機構改革要求を履行しようとはせず、逆にアメリカの要求を内政干渉だとして批難した。また戦略村計画などはジェムおよびその弟で秘密警察を握るゴー・ディン・ニューの権力基盤拡大のため恣意的に利用された。

このような各種オプションに基づく反ゲリラ戦争の遂行は、その成果がきわめて不確かであった。悲観的な國務省に対して、国防総省は楽観的な見通しを誇張する傾向が強く、それは戦果をベトコンの^{ホ・ダイ・カウ・ソント}人的損失量で測る方法によって一層助長された。というのもジェム政権は各省の政府軍司令官に対する割当金

を、戦果に応じて増減させていたからであり、その結果戦果報告にはかなりの水増しがあったのである。

こうした点からケネディ政権の下で遂行された反ゲリラ戦争は、結局アメリカ側の軍事コミットメントを増大させると共に、その半政治的な性格ゆえにジェム政権に国内改革を迫り、内政干渉を招来していったといえよう。しかし何にもまして重要であったのは、著者達も何度か指摘しているように、ケネディ政権が南ベトナムの行方にみずからの威信をかけ、ここを失えば東南アジアしいては世界で後退を強いられるのだという観念に取り憑かれていたことであろう。それはまた冷戦の文脈の中では、抜きさしならぬものであった。ただし、その一方で留意されることは、ケネディが一貫してアメリカの通常兵力による本格的なコミットメントを回避してきた点である。

ジェム政権の崩壊

本論で重要なもうひとつの面は、ジェム政権が崩壊に至るまでの過程である。これは主に本書の後半部分を費やして分析されている。

共産ゲリラに対する戦いが「手詰まり」^{ステールメート}を招いてゆくに及んで、ケネディ政権は南ベトナムのジェム政権の独裁と無能に疑念の眼を向けるようになっていった。すなわちジェムと共に戦って勝つことはできるのかという問題である。

ケネディが大統領に就任する直前の1960年11月に起こった南ベトナム政府軍^{パラトルーパー}の降下部隊によるクーデターの試みに示されるように、ジェム政権は共産勢力だけでなく、体制内にも少なからぬ敵をかかえていた。とりわけジェムの弟ニューの権力の肥大化は、アメリカでも懸念の眼で見られていたのである。

しかしながら、結局ジェム政権の崩壊に直接を道を開いたのは戦争でも権力争いでもなく、仏教徒との宗教対立であった。1963年5月、カトリック教徒であるジェムの不当な宗教政策がもとで、仏教徒と警察隊の間に衝突が発生し、政府側がそれを力でねじ伏せようとしたことから仏教徒の抗議デモは全国化した。特に5月の最初の衝突で仏教徒に7人の犠牲者が出た上、6月にはサイゴンで老僧が抗議の焼身自殺をとげたことから問題は一層大きくなった。

ケネディはベトナムでのこの新たな事態に衝撃を受け、「大統領になって初めて、日々ベトナムに関心を払い始めた」のである。そして彼の政権はジェムの仏教徒弾圧政策を批判し、ジェムから一定の距離を置くようになった。アメ

リカと南ベトナムの関係は険悪化した。ケネディは6月27日、ジェムに宥和的なフレデリック・ノルティングに換えて共和党のヘンリー・キャボット・ロッジを駐南ベトナム大使に任命した。一方南ベトナムでは、8月21日全土に戒厳令が施行され、ニュー指揮下の特殊部隊が寺院を襲って仏教徒1400人以上を逮捕した。こうした中で、南ベトナム政府軍の反乱将校グループが反ジェム・クーデターを企図し、アメリカ側へのアプローチを開始した。

こうして、1963年8月後半から反ジェム・クーデターが起きる11月までの間、ケネディ政権の中では南ベトナムへの対応をめぐる大きく意見が分れることになった。ひとつの意見は國務省・CIAの中堅補佐官および何名かのNSCスタッフを中心とする人々によって代表されており、「ジェムといっしょでは戦争に勝てない」というものであった。もうひとつはノルティング元大使、国防総省幹部、JCS、CIAの上級補佐官を中心とする人々によって代表されており、「ジェムなしには戦争に勝てない」というものであった。特にこの両派の対立は、ワシントンが夏期休暇中の8月24日、國務省の補佐官達が大統領を含む数人のスタッフに連絡をとったうえで、アメリカ政府の見解として南ベトナムにおける反ジェム分子のクーデターに事実上のゴー・サインを送る公電をサイゴンのロッジ大使宛てに打っていたことから、一層重大なものになっていた。しかしながらこうした両派の対立にもかかわらず、著者達は以下のような鋭い指摘をしている。

「ジェムと戦争（の問題）をめぐる、ケネディ政権では激烈な論議が戦わされた。けれども大統領も補佐官達も、再度アメリカのベトナム介入についての一層重大な問題を避けて通ったのである。……すなわち、ジェムといっしょであろうとなかろうと、この戦争には負けるかもしれないということ。」

〔括弧内および傍点は評者〕

結局この両派の考えは、必ずしも相容れないものではなかったのかもしれない。けれども、ここでも冷戦思考は支配的だったのである。因みにケネディ自身は9月2日のCBSテレビインタビューでジェム政権に対し「政策と人材の変更」を要請していたことに示される通り、両派の中でもかなり前者の考えに近かったものと思われる。

最終的にケネディ政権は南ベトナムへの経済援助を静かに削減・停止し、クーデターの動きにはこちら側からイニシアチブをとらぬという方針でのぞむこと

になった。つまりクーデターを支援することも紛砕することもしないという態度であった。

アメリカは「公式」にはクーデターにかかわらないという立場にあった一方で、「非公式」にはC I Aのサイゴン駐在情報将校ルシアン・コネインを通じて南ベトナムの反乱将校達についての情報を収集した。そして10月9日には、責任ある政府を組閣することができ、^{オルターナティブ} ジェムに代わりうる人物が見つかり次第力づけよという訓令が出されていたから、親クーデター的な距離の置き方であったといえる。11月1日から2日にかけて、ズオン・バン・ミン將軍を指導者とする反ジェム・クーデターは順調に進み、革命委員会の手で新政府の樹立が宣言された。同時に逃避行中であったジェムおよびニューは政府軍関係者の手で逮捕され、殺害されたのだった。これについて著者達は次のような分析を行っている。そもそもニューの暗殺計画についてはクーデター発生以前に反乱将校達の間で持ちあがっていることをC I Aは関知していた。しかしながらアメリカはクーデター計画そのものに直接関与しないという方針であったから、C I Aもこの暗殺計画への関与を慎重に避けたのだという。しかし関与を避けたということは暗殺を否認したことを意味するものではなく、しかも暗殺が行われた場合の「将校達への制裁」も明示されなかったので、結局アメリカは間接的に暗殺計画に手を貸してしまったといえた。しかもクーデター勃発17時間後の11月2日になっても、アメリカ側ではゴー兄弟を国外に逃すための飛行機さえ準備していなかった。これが偶発によるのか故意によるのかは確証できないようであるが、ケネディ政権の対応がゴー兄弟の生命を危険にさらすものであったことは事実といえよう。

もし、ケネディが生きていたら

ジェム政権崩壊後、政治権力の中核を失った南ベトナムの情勢はますます悪化し、相次ぐクーデターで政権は交代した。アメリカも介入の度合を深め、北ベトナムの労働党は混乱する南の情勢に乗じて積極的攻勢への決意を固めてゆくのである。

ケネディは結局二つの大きな遺産を残したといえよう。すなわち（限定的ではあるが）軍事的なエスカレーションと良くも悪くも南ベトナムの政治的中核体であったジェム政権の喪失である。それにもかかわらず、著者達は「もしケ

ネディが生きていたら」、ジョンソンとは異った方向を選択しただろうと推測する。まず「疑いもなく、ケネディは1964年の選挙が終わるまで、ベトナムで^{ヘッド・チョイス}の真の厳しい選択を延期したであろう」と述べられている。おそらくこれはもっともな意見であろう。さらに1965年初頭、マークジョージ・バンディ国家安全保障問題担当特別補佐官とロバート・マクナマラ国防長官によって、ベトナムに対してアメリカは直接的な軍事行動に出るべきか、それとも交渉への道を選ぶべきかといういずれにせよ「慎重に研究された」選択案がジョンソン大統領に提示されていた。著者達によれば、もしケネディであれば、それがベトナム、ラオス、カンボジア三国の共産化に接がり、またアメリカの国論を分裂させたとしても、「交渉の道を選んだかもしれない」としている。その理由として、アメリカはすでにベトナムでは政治および軍事におけるあらゆるイニシアチブを喪失していたこと、またケネディはみずからの失敗によって北爆や地上軍介入の効果に揺るぎない疑念を持っていたことを挙げている。むしろ彼は、死の床にある病人のために最善を尽くした「良^{グッド・ドクター}医」として振舞い、いわばベトナム特有の病因一悪しき植民地の遺産、自治政府への準備がおろそかであったこと、共産主義者によって枠をはめられたナショナリズム運動一を強調してコミットメントを縮小し、南ベトナムを「喪失」したという印象を取り除こうとしただろうと推測するのである。そしてむしろベトナムからの撤退により、ケネディはみずからの政治的勇気を誇示する機会を見出したかもしれないと結論づけている。しかもこのシナリオは、1964年の後半に実際アメリカで想定されていたものらしい。ユニークな意見である。だがあえて言うならば、ケネディがベトナムでのステータスをみずからの威信との関連で理解していたことを考える時、そこから抜け出すには政治的勇気と共に並々ならぬ政治的英知をも必要としたであろうと思われるのである。